

版画工房を中心とした地域文化拠点の構築に関する研究

A Study on the Construction of Local Cultural Base Centered on Printmaking Studio

小松 佳代子
KOMATSU Kayoko

坂井 友美
SAKAI Tomomi

岡谷 敦魚
OKANOYA Atsuo

キーワード：版画工房、このすく、Arts-Based Research
Keywords：Printmaking studio, KONOSK, Arts-Based Research

This paper has reported the process of construction and some activities of 'Arts-Based Research labo & HANGA studio KOBO KONOSK', which was established in June 2020. The studio is equipped with facilities for copperplate print and silkscreen. The place is used not only for making art but also for several cultural activities, such as art workshop, reading circle, and cultural lectures. This place is characterized by the compound function. It is the alternative place free from a specific function, where we can drop in anytime without hesitation for creative practice or discussion.

1. 出発点

本研究は、地域文化を形成していく一つの方途として、制作と議論ができる拠点にどのような可能性があるのかを考察するものである。具体的には、筆者3人を含む計6人で長岡市呉服町にあるギャラリー masion de たびのそら屋の「月の間」に2020年6月に立ち上げた「Arts-Based Research labo & HANGA studio 工房このすく」の2020年度における活動を報告する。

工房の立ち上げは、2020年6月だが、工房設立の構想自体は、2016年夏に遡る。現在416WATARIMACHI Studioとして運営されているビルのリノベーションが始まる時に、本学版画研究室の卒業生である永井愛さんと大橋麻耶さん、吉村英里子さんが、その一室を版画工房として利用することを計画し、この事業に参加した。大学や大学院で版画を学んでも、その後続けていく場がなかなか見つけれられないという状況で、自分たちで制作場所を創り

出していこうという動きである。3人の指導教員であった岡谷は、卒業生が制作を続けられる場をつくるのが工房設立の動機であったことを、本学のホームページのNID Focusでのインタビューで語っている¹。

しかし上記ビルに入居することは諸般の事情から2017年には断念され、この話は一度立ち消えになる。2018年4月小松が長岡造形大学に着任、その年の12月に、金沢美術工芸大学の卒業生や教員が、議論や制作・展示の場所として大学近くに建物一棟借りてつくった「芸宿」を見学した。オルタナティブスペースの可能性を感じ、市内在住の美術家コイズミアヤさんと、こうしたスペースを長岡にもつくりたいという話をした。コイズミさんは、金友子『歩きながら問う 研究空間〈スユ+ノモ〉の実践²』で紹介されている、議論や研究会などができるスペースを参照しながら、制作だけでなく、さまざまな人が集い文化的な話が気楽にできる場をつくることを構想していた。絵画制作者である坂井は、当初は絵画制作場所を探していたこともあって参加したが、それだけではなく、大学職員として市民工房やこどもものづくり大学校の運営に携わった経験からか、街中に学校でも自宅でもない、もう一つの居場所づくりを構想していた。

それぞれのイメージはバラバラではあったが、何かしらの場をつくりたいという思いだけは一致していて、学生の行き来などを考えて大学近くに物件を探した。2019年2月に大学近くの鉄工町にある工場物件を見学に行き、それぞれの思いが具体的な像を結び始めた。だが、この話は、場所の使用方法や家賃など、さまざまな点で折り合いがつかず、一旦立ち消えになった。それが2019年11月になって、コイズミさんの交渉により、ギャラリー masion de たびのそら屋の「月の間」を借りる話が具体化し、わたしたちの計画が再び動き出すことになった。ギャラリーの運営者がこれまで構築されてきた地域の方との人間関係もあり、全く新たな場所で一から文化拠点をつくるよりも、わたしたちがつくろうとしている工房が、地域の方に受け入れてもらいやすいのではないかという期待をもちつつ、準備を進めることになった。(小松)

2. 工房の立ち上げ

まずは工房の整備である。版画工房として運営するには、プレス機や作業台の搬入、水場や腐蝕槽の設置などが必要であった。2020年6月1日から借りることを決め、具体的に動き出した。しかし、実際の工房の運営に関しては、コロナ禍によって、当初の予定とは全く異なるものにならざるを得なかった。



プレス機（現在は右の銅版用のみ）



腐蝕にも対応できるドレーン付きの水場と奥行のあるシンク

場所を整備したら、まずは近隣の方や市内外の制作者を招いてお披露目をしたい、できれば軽食を用意してなどと考えていたが、コロナ禍で人が集まること、ましてや食事をするなどできない状況であり、そうしたことを抜きにここでできることをあらためて考えることになった。

人数を限定した制作やワークショップ、オンラインでの研究会や講演会の実施は、すぐにでも動き出せそうだったので、Wi-Fi やモニターなどの整備を追加で行った。街中に工房をつくって、人がいつでも集える場所にするという当初の目論見は立ち上げ時点で頓挫することになったが、オンラインも含めてここから発信することで、この場所を開いていく範囲が広がることにもつながったと言える。(小松)

3. 活動

2020 年 6 月から 2021 年 3 月までに工房このすくで行った活動について記述していきたい。年度計画を立てて行ったというよりも、その都度メンバーが立案したり、外部からの依頼に応じたりして行ってきたものである。

(1) このあたりのこのすく展

近隣地域への場所のお披露目と、創設メンバーの紹介も兼ねて 2020 年 10 月 8 日から 16 日にかけて工房スペースで展覧会を行った。同時期に隣の maison de たびのそら屋で「猪爪彦一展 異郷」が開催されており、ギャラリーに来た方が工房にも立ち寄ってくださったため、思いのほか多くの方にご覧頂くことができた。ギャラリーとの共同企画として、2020 年 10 月 11 日には、猪爪彦一先生が工房このすくの設備を使って銅版画を刷る様子をインスタライブで中継した。

創設メンバー 6 人のうち 4 人は版画を、ペインターの坂井は水彩画を、小松は研究の現場を垣間見られるような展示を行った。(小松)



「このあたりのこのすく展」
展示風景



(2) 月曜版画部

月曜版画部は、2020 年 11 月 30 日から年末年始以外の月曜日に、ほぼ毎週おこなっている銅版画制作のための活動である。きっかけは、11 月 15 日に行われた「かきがわひらき」(本誌 6 参照) での永井愛さんによる塩ビ板を使っ

たワークショップである。参加した市民の中で、本格的に版画制作をしたい参加者がいたこと、また、直接このすくの SNS に版画を制作したい市民からの連絡があったことで実現した。銅版画未体験の参加者は、創設メンバーの永井、コイズミ、岡谷が道具の使い方や版の制作方法、刷り方の指導をするが、基本的な技術を理解した後は、版画部の名称の通り、各々のペースで自由に制作していくスタイルをとっている。制作にかかる費用は、個別の材料費の他に、会費という形で会場や施設の維持費等の一部を負担してもらい運営している。現在、部員は 3 名前後で活動している。長岡市民のみなさんに、銅版画を制作してもらう設備と機会を提供する場となっている。(岡谷)



月曜版画部活動風景

(3) 文化講演会

2020 年度は 2 回行った。2020 年 10 月 31 日には京都大学大学院教育学研究科教授の西平直先生をオンラインで招いて、西平先生のさまざまな研究に触発されて研究を進めている長岡造形大学の大学院修士・博士課程の学生 3 人が研究発表を行い、西平先生と議論をするというものである。工房に集まったのは数名で、あとはオンラインで東京、京都、金沢、韓国大邱など、合計 24 名であった。

大学の公開講座や特別講義などと変わらないように見えるが、参加者の一人が、大学とは異なりこうしたスペースが発信場所となっていることで参加しやすかったと発言してくれたように、街中にある工房主催であるということは意外に重要なことである。その方は、長岡にこのすくがあることの良さを改めて認識したとも語っていた。美術制作や美術教育についての研究を発信していく場でありつつ、市民に開かれた場でもあるという工房このすくが、この長岡にある意義が示されたのではないだろうか。

もう一回は 2021 年 2 月 11 日、彫刻家であり彫刻研究者もある小田原のどかさんを招いて、「美術と社会との交点」をテーマにオンラインで開催した。戦中戦後の日本の公共彫刻を巡る問題を中心に、彫刻制作者や美術教育研究者、美術評論家、大学生、美術に関心のある市民などの参加者を交えた対話が行われた。小田原さんが小谷元彦さんと共同キュレーションし、2020 年 12 月に東京藝術大学大学美術館陳列館及び大石膏室で開催された『Public Device - 彫刻の象徴性と恒久性』の内容や、展覧会に向けての問題意識などを話された。本学の教員や学生も含めて 32 名の参加があった。(小松)



文化講演会フライヤー

(4) 読書会

2018年7月から小松が学内で、月1回程度のペースで学生や市民の方と続けてきた読書会を工房このすく文化事業へと移した。コロナ禍により学外者が学内に入れなくなったこと、オンライン開催にすることで遠方の人でもメンバーになることができること、通算20回を越えて新たな形で読書会を運営していくことを構想したことがその理由である。

読書会は、毎回発表者自身が読みたい本を選定して、参加者には事前にその一部を読んできてもらい、1週間前にはレジュメを配布して当日それをもとに議論するという形をとっている。2020年度に工房で行った読書会は以下の通りである（括弧内は発表者）。毎回工房には4人から5人程度が集まり、あとはオンラインでの参加者が10人ほどである。

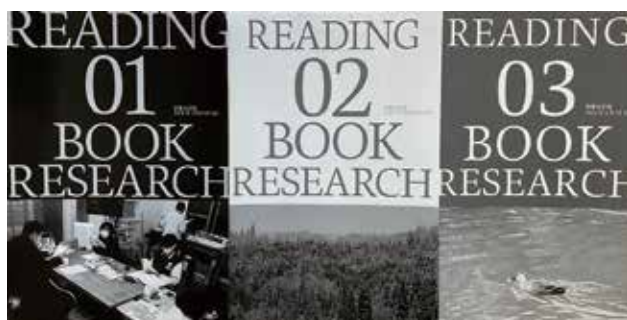
- ・第18回：2020/6/5 トマス・ネーゲル『コウモリであるとはどのようなことか』勁草書房1989（橋本大輔）
- ・第19回：2020/7/10 ブルーノ・ラトゥール『社会的なものを組み直す—アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局2019（小松佳代子）
- ・第20回：2020/8/21 エマニュエル・レヴィナス『時間と他者』法政大学出版局2012（櫻井あすみ）

ここまでは学内で行ってきた読書会の続きである。以下が新しいやり方で再スタートした読書会の内容である。

- ・Ver2 第1回：2020/10/23 エリザベス・グロス『カオス・領土・芸術—ドゥルーズと大地のフレーミング』法政大学出版局2020（小松佳代子）
- ・Ver2 第2回：2020/12/25 市川浩、中村雄二郎 編『身体論集成』岩波書店2001（竹本悠太郎）
- ・Ver2 第3回：2021/3/19 中森弘樹『失踪の社会学—親密性と責任をめぐる試論』慶應義塾大学出版会2017（岩本彩花）

Ver2と称して再スタートした読書会も基本的な運営方法は同じであるが、ただ当日集まって議論するだけで終わらず、選書理由と当日の議論を受けたコメントを掲載したZINEを発行することにした。ZINEのデザイン・編集は、大学院生の飯塚純さんが担ってくれている。ZINEという形で記録を残し、読書会の様子を開示していくことで、わたしたちの活動を少しずつでも学内外の方に理解されるよ

うにしていきたいと考えている。（小松）



2020年度に発行した読書会のZINE

(5) 夏休みこどもワークショップ

2020年8月16日に、坂井が小学生を対象にワークショップを実施した。街中で、絵やものづくりが好きなこども達がつくることに触れる場を開きたいと考えていたことから、実験的に行ったワークショップである。市内の小学生4名が参加し、事前リサーチしてもらった空の様子のことばから色を作り、アクリル絵の具と布を使って「空」を描いた。当時は、コロナ対策の雛形がまだ十分になく、試行錯誤しながらの開催であったが、小さな会場であるからこそ、フットワークを軽く実施できたものと考えている。2020年度はこのワークショップ以降開催できていないが、「このあたりのこのすく展」にて実施したアンケートからも、こどもを対象としたワークショップを希望する声も多く聞こえてきており、本ワークショップで得られた経験や改善点を踏まえ、「このすく」という場所で、こども達の参加しやすい場をどう継続的に開いていくことができるかが今後の課題である。（坂井）



ワークショップでの制作の様子



作品を雁木に展示

(6) 外部団体との協働

工房のメンバー発信の活動ではなく、別の団体から声をかけてもらい実施した活動もある。2020年度は以下の2つのイベントにこのすくとして参加した。

①かきがわひらき：「柿川のほとりを歩いて楽しむ、さんぽ型マーケット。柿川のせせらぎがよく似合う、雑貨や飲食、ワークショップ、体験などを点在する拠点を巡りながら楽しむ一日」というコンセプトの下に、2020年11月15日に開催された「かきがわひらき」に参加した。当日は、このすくメンバーの永井愛さんによる塩ビ板を使った版画ワークショップと、本学大学院生による銅版画制作のデモンストレーションを行った。天候に恵まれたこともあって、一日に80人もの方が工房に立ち寄ってくれた。わたしたちの工房だけではできることは限られるが、地域の方と協

力すれば、さまざまなことができると感じられた。

②芸術工事中：2015年から本学の教員と学生が毎年行ってきたアートプロジェクトだが、2020年度はコロナ禍のためオンラインでの実施となった。2020年11月と2021年2月に行われたオンライン中継に、工房このすくも参加した。場所の紹介と版画のデモンストレーション、また工房このすくの基本的な考え方と活動紹介、今後の展望などをプレゼンテーションする機会も得られた。視聴者は少数ではあったが、人の移動が制限されるなかで、工房のことを長岡市内外の人に知ってもらう機会になったと考えている。(小松)

(7) 版画制作工房として

月曜版画部とは違い、短期で版画制作を行っていく市民もいた。印刷業者のように大量の印刷物を安く制作するために利用するのではなく、個人や個人事務所の表現を支援する目的で、少ない部数印刷する人達を対象とした事業である。材料は個人で準備し、会費を納めてもらい運営している。

①2020年9月10日に、新潟県を中心に活躍しているアーティストのしんぞうさんがこのすくを利用した。普段はアクリル絵具での絵画制作を行っているが、アーティストグッズを販売する話があり、その制作のためにこのすくを利用することになった。しんぞうさんは3日間ほどでグッズの制作は終了したが、その後は自身の作品制作として、塩ビ板によるドライポイントでの制作に取り組んでいる。

②2020年10月29日、旧長岡藩牧野家第17代当主牧野忠昌さんのアルミ板のドライポイント作品の印刷の依頼があった。この版は、牧野さんが中学生の時にノートルダム大聖堂を描き製版したが、印刷までは出来なかったものだという。大切に保管された版は、このすくのプレス機で印刷し、無事に作品として日の目を見ることとなった。この作品は、フリーペーパーの『My Skip』2020年12月号にも掲載された。

③2020年12月23日に、若手アーティストのワタナベメイさんが、塩ビ板によるドライポイントの制作にきた。普段はアクリル絵具での平面絵画を主に制作している。普段から筆を使わずに、盛り上げた絵具を針で削りながら制作するスタイルが特徴の作家である。所属している羊画廊のオーナーは、版画作品販売にも意欲的な方で、以前からワタナベさんに版画制作を勧めていたこともあり、ワタナベさん自身も興味をもっていたようだ。その後何日間かけて質の高いドライポイント作品を数点制作している。

④2020年12月23日に、本学の卒業生である佐藤友香さんが陶器にロゴなどをシルクスクリーンで印刷出来るか実験にきた。佐藤さんは妹の陶芸作家と組んでアートユニットのKanicko Ceramicsとして活動している。ロゴなどのデザインを剥離紙に陶器の釉薬を使ってシルク印刷し、その紙を陶器に貼り付けて一緒に焼くことで印刷したものを陶器に焼き付けることが出来るようだ。実験の結果、無事に陶器の表面に印刷出来ることがわかり、今後の展開が楽しみな事例となった³。

2020年度は以上の事例があったが、2021年度は、個人経営の飲食店などのオーナーから、自身の店のオリジナル

グッズ制作の話が数件来て実施している。シルクスクリーンはいろいろな素材に印刷することが出来るため、さまざまなグッズ制作に向いている印刷技術だと言える。しかし、素材に応じたたくさんの種類のインクの在庫を抱えることにもなりかねないので、依頼主と素材と予算についてよく相談して進める必要があると感じている。利用する市民の方達の表現の幅を広げることに寄与することが出来る場所としての可能性を感じた。(岡谷)



左：①のしんぞうさんの作品



右：③のワタナベメイさんの作品

(8) その他

これまで見てきたような、定期的な研究会やイベントの他に、工房は数人で会合するには非常に有効な場所であった。メンバーが個人的に関わっている研究会や団体の会合を行うには、どこか場所をとるとか、喫茶店に行くなどしなければならなかったものが、工房このすくがあることで、心理的な障壁もなく、また金銭的な心配もなく集まることができる。もちろん工房を長く運営していくためには、こうした利用者にも一定の利用料を払ってもらうことが必要なのかもしれないが、現在までのところ、家賃を支払っている工房メンバーが主催する会合に利用料を請求することをしていない。コロナ禍のため、以前は大学で行うことができた研究会なども、教職員や学生以外の参加者がいる場合は、学内で実施できない。その意味でも工房は真正な意味でオルタナティブスペースとなっている。利用料を請求してしまうと、工房で会合をひらくメリットが減ってしまう。特に制作場所として利用していないメンバーにとっては、人と話すためにいつでも使える場所であることが、工房の重要な側面だからである。

2020年度は、坂井が事務局長をしている絵画と版画の研究室を卒業した者の集まりである「白雪ノ会」や、小松が日本学術振興会の助成を受けて行っている研究会、また上越教育大学と本学の博士課程の大学院生の交流研究会などが行われたほか、個人的な打ち合わせ場所として利用されてきた。(小松)

4. 工房の位置づけ

見てきたように、工房の位置づけは、創設メンバーそれぞれによって異なるものの、いつでも気兼ねなく制作や議論ができる場所が「ある」ということを重要だと考えていることは、概ね一致している。制作者にとっても、ひとりで工房をつくるよりも、そこへ来てつくりながら話す、つ

くなくとも美術の話ができる場所が「ある」ということが、この工房の意味なのだろう。職場とも自宅とも異なる「もう一つの」場所という意味でのオルタナティブスペースである。つまり、そこで「何が行われるか」ということ以上に、工房が「ある」こと、そしてそこに自分がいてもよいと思えるような居場所であるということが重要なのである。

それだけではなく、常に何らかの成果を求められる目標管理型社会に対して、工房このすくは、「場所」はあるけれども、機能はさまざまであり、むしろ何らかの機能に絡め取られないような、単なる居場所であるということが、実は非常に重要なのではないか。

創設メンバーのうち3人（本報告の執筆者）が大学関係者であり、オルタナティブスペースとして工房を位置づけるときに、常に大学の延長線上で考えてしまう。大学人だけでつくっているわけではないスペースを大学の延長として位置づけるような考え方には、他のメンバーから違和感が表明された。研究の一環として、大学からの補助を受けつつ立ち上げた工房であるが、同時にメンバーそれぞれが毎月の家賃や光熱費を拠出し、大学とは独立して運営を行っているスペースでもあるという微妙な位置が、良い時もあるが、問題を生むことにもなるのである。

こうした問題を解消するためには、メンバー相互で十分な話し合いをして合意をとっていくべきなのかもしれない。だが、工房を立ち上げてからメンバー全員での会議は一度しか行っていない。全員が揃う時間がとれないということもあるが、見てきたように、それぞれの思いが多様で、それを何かしら統一した見解へと方向づけていくことが必ずしも良いことだとは考えられなかったということもある。

工房を6人で立ち上げたと言うと、よく訊かれるのは、

「トップは誰ですか？」という質問であるが、私たち6人は横並びで誰がトップということもない。それぞれがそれぞれの考えで工房をより良いものにしようということだけが合意されていると言えよだろうか。もちろん、ひとたび何か問題が起きたときに、うまく解決する手段が工房の運営に組み込まれていないことは、リスクと言えるかもしれない。しかし、さまざまな組織体が目標を掲げそれをどれだけ達成したかという成果主義に苛まれている状況において、このような緩やかなまとまりのままに工房を運営していくこと、それ自体が一つの社会実験とも言えるのではないか。（小松）

5. 今後に向けて

今後の展望もまたそれぞれである。卒業生がここで制作をして、版画の作品や販売できる商品が生み出されていったらよいと願う人、コロナが収まればたくさんのアーティストに活用してもらって、集いのなかで新しい発想や作品が生まれる場になったらよいと思う人、放課後に美術好きの子どもたちが集まって何か自分の好きな制作ができる場所、しかもそれは絵画教室のようなものではなく、ふらっと立ち寄れる部室のような場所であつたらよいと考えるメンバーもいる。それぞれが、フラットに自分たち自身で自分の思いを展開していく場として今後もこの活動を展開していきたい。

さしあたり2021年度は、これまでの活動を継続していくことに加えて、新たに小松が特別研究費の助成を受けて、3人のアーティストに滞在制作してもらい、アーティストと市民とが会える機会をつくっている。この場所が開かれて、市民とアートやデザインとの間にある見えない障壁が少しずつでもなくなっていくことが、遠い将来の目標である。（小松）

¹ 長岡造形大学 HP
<https://www.nagaoka-id.ac.jp/topics/magazine/5418/>
(2021年8月17日最終アクセス)

² インパクト出版会 2008

³ 以上の三つの事例、前述の月曜版画部で制作された作品は、2021年9月24日から10月3日まで maison de たびのそら屋で開催された「このすく展」にて展示された。